外国人材、欠かせぬ力

特養「宍戸苑」（笠間）

ミャンマー人ら、浸透

笠間市橋爪の特別養護老人ホーム「宍戸苑」は、外国人の職員が10人以上働き、欠かせない〝戦力〟として浸透している。

笠間市の農村地域の高台にある同施設は、水田に囲まれ、遠くに山影を望むのどかな雰囲気が特徴だ。玄関を入ると、居室や食堂でくつろぐ入所者の間に、介護や調理に当たる外国人職員の姿があった。

チー・チー・チョウさん（24）とノー・タン・ルイン・ユさん（21）の2人は、いずれもミャンマー出身。高校を卒業後、現地の日本語学校で1年半学び、日本語能力試験「N3」（日常的な日本語をある程度理解できる）を取得。トレーニングセンターを経て特定技能資格で来日した。チーさんは来日1年超、ユさんは9カ月ほどになる。

2人は朝、日誌を読んで申し送りを把握した後、朝食やトイレの介助、入浴、お茶配り、昼食などを担い、昼休憩に入る。午後はトイレ介助などを担いながら、必要に応じて入所者を手助けする。

10月下旬の午後、チーさんは冷たい麦茶とお茶を載せたカートを押しながら、「どちらにしますか？」と入所者に声をかけていた。飲み物をコップに注ぐと、チーさんと入所者双方に笑顔が広がった。



㊨飲み物を配る際、入所者からVサインを向けられ笑顔を見せるチー・チー・チョウさん㊧声をかけながら車いすを押すノー・タン・ルイン・ユさん＝笠間市橋爪の宍戸苑

ユさんは「おトイレに行きますか」と女性に語りかけ、車いすを前に進めた。2人とも入所者の表情、様子をさりげなく観察し、相手が抱く要望をくみ取っていく。対応後は、チェックシートに個々の状況を書き込むことも忘れない。

増渕晃事務長は「日本人職員のなり手が少なく、外国人材は欠かせない存在。いなくては仕事が回らなくなっている」と現状を語る。「遠い国から来て、本当に頭が下がる。研修を受けてくるので日本語を理解できるし、仕事を覚えるのも早い」と信頼を寄せる。

内戦が続く母国の状況などを踏まえ、2人は「日本は安全。仏教国のミャンマーと似ているところも多い」と、来日した理由を説明する。現在は業務と並行して介護福祉士になるための「初任者研修」を受けている。国家資格に挑戦し、介護の仕事をさらに深めていく考えだ。

仕事では、「笑顔でありがとうと言われるのがうれしい」と話すチーさん。夢は「お金をためて、いつかミャンマーに戻って家族と住みたい」と語る。日本行きを選んだ理由の一つにアニメ好きを挙げたユさんは、将来を「母国の大学で経済を学びたい」と展望する。

意味や読みが複数ある漢字の習得など、慣れない日本語と格闘しながら、2人は夢に向かって歩みを進めている。